



同志社人物誌 (14)

安部磯雄

安部民雄

安部磯雄が同志社に入学したのは明治十五年（一八七九年）で、数え年十五の時であった。九州の福岡からはるばる京都に出て来たのは親戚の者が勧めたからで、ある意味では全く偶然であったと言える。しかし、この偶然的な同志社入学こそは安部磯雄の一生を決した最大の出来ごとであった。同志社におい

て学ぶことは新島先生によって文字通りの薫陶を受けることであり、徳と知が見事に合一したこの理想的学校は、人間の持つべき最高の理想を安部磯雄の心に刻み込んだばかりでなく、数々のよい習慣を植え付けたのである。「安部さん、よくやりました」新島先生は皆に「さん」を付けたそうだが、八十五才で亡くなるまで、子供のようになり、こうした言葉を新島先生から天国で再会の折頂けるように励

んだとも言える。（これは私の想像でなく、晩年のある日この主旨のことを私に洩らした）同志社入学の第一年から外人の先生が地理とか経済を教え、一年の終りには英語で答案を書いたそうである。一年間で英語が出来るようになったことは今のわれわれから見ると驚くべきことであるが、当時遠くから上級学校に入学するような者は出身地の近郷近在では大秀才だったに違いない。授業は週五日で十五時間、午後と夜は予習に費やし、日曜の午後は学生全員遠足に行くと言ったような、今では到底考え得られないような理想的教育が行われていた。

当時、日本にも優れた教育者が居たが、新島先生には大きな特徴があった。これは外でもないデモクラシーの精神である。デモクラシーの精神などと言うより分り易く言うなら、師弟、先輩後輩、貴賤ということ人間を区別しないことを新島先生は実践された。国禁を犯して早く渡米され、最もよき意味の米国のデモクラシーを身につけて帰られた新島先生は、従来の師の概念とは全く違った独特な存在として生徒たちの目に映ったことと想う。儒教的な日本の人間関係も、よいとこ

るはあつても確かに気づまりであることは事實である。こうした当時の日本の社会的雰囲気の中に、解放された気安い気持で師に接することが出来た当時の同志社が独特の気風を持ったことは容易に推測することが出来る。

自伝の中の一節を引用する。『新島先生はデモクラシーの精神に徹底して居られたのであるから、私共を恰も同輩であるかの如く待遇された。その一例を挙げれば、先生は一度も学生を呼びずてにしたり、或は何々君と呼ばれたことはなかった。如何なる人と呼ぶにも何々さんと言はれたのである。これは決して学生だけに限られて居ない。学校の小使であるが、人力車夫であろうが、先生の目から見れば何れも同胞兄弟である。……先生は学生から「先生」と呼ばれることを好まれなかった。或時先生は私共にこんなことを言はれたことがある。「私共は神の前に於て誰も同胞兄弟であるから、今後皆さんはどうぞ私を新島さんと呼んで下さい」先生は真面目にこれを要求されたけれども、これだけは何人も服従することが出来なかった。』

安部磯雄は一生を通じて、人間を平等に見るといふこの新島先生の考えを実践しようとする

した。父親なるがゆえに、また年長者なるがゆえにということには言葉の上では勿論のこと、行為にも決して子供たちにすら示したことは全くなかった。全く気易く接し得る民主的な父親であつた。

2

キリスト教を莫然と邪宗と考え、同志社が熱烈なキリスト教主義の学校であることを幸にも知らずに入学した安部磯雄は（不幸にしてその事が前に分つて居れば行かなかつたら）同志社在学五年間の中に言わばその人間としてのデッサンが出来上つたのであつた。

卒業後郷里福岡へ帰り、間もなく同志社で教鞭を取るようになったのが明治十九年（一八八六年）、二十年には岡山教会の牧師となつたが、時に教え数二十三才。

明治二十四年（一八九一年）米国の神学校に三年有余留学、更に歐洲に行き、ベルリン大学を聴講する。こうした約四年に及ぶ外遊は多くの貴重な経験と共に中に内蔵されていたものが明確になったり、あるいは具体化した。まず特筆すべきは社会主義者となつたことである。自伝を引用する。「私は先ず第一にニ

ューヨークに於ける社会事業の視察（夏休みに行った）に就て吟味し初めた。ニューヨークには一千以上の社会事業が行はれていて、ロンドンの社会事業はその数に於て遙かに勝つていと聞いている。然かも社会事業の数は年々増加しつつあるといふではないか（それでも貧乏が減らないのであるから）これでは社会事業によりて社会の貧乏を根絶するといふことは永久に不可能なことではないか。これがその当時に於ける私の感想であつた。

私はキリスト教の人道主義によりて将来社会主義者となるべき素地を与えられていた。然るに今や社会事業が貧乏撲滅の方法として不十分であることを覺つた私は最早一歩で社会主義の領土に踏み入ると言ふ所まで進んでいたので「私の社会主義思想が多くマルクスに負ふ所あるは事實であるが、私はその当時から現在に至るまで常に社会主義を精神方面から見ていた。私共は生きながらために食ふのであつて、食はんがために生きているのではない。結局私共には精神生活が目的であつて、物質生活はその手段に過ぎないと言ふのが私の考え方である。』

安部磯雄においてはキリスト教の人道主義

が当然彼を社会主義者にしたのである。人間が少し考えることによって、避け得られる衣食住に起因する不幸から救われ得るではないか、人間がお互に同胞を人間として見よう、政治経済をそうした観点から考え直そうと言ふことであつた。「私は宗教を狭い意味に解していない。私は伝統的キリスト教の中に教育されたけれども、現在では人類愛といふことだけで私は生きるようになった。この人類愛を中心として宗教と社会主義が渾然として私の心に融和しているのである」と自伝に書いている。

3

新約聖書の中にある数々の奇蹟についての疑問が岡山で牧師になつた時から切実な問題として浮び上つて来た。恐らく自分が納得し得ないことを他人に説く気になれなかつたのである。当時ドイツで聖書の高等批評の研究が盛んであり、この奇蹟の問題を解決するためにドイツ留学を計画した。米国大学の最終学年のある日、学長に会いドイツ留学について相談したところ、数日後呼び出されて、ある人が三年でも四年でもドイツ留学の費用

を出すと申出たとのことを伝えた。そのような親切な申出を誰がしてくれたのかと聞くに、本人の希望で名前を出したくないとのこと、学長は神から授かつたと思ひなさいと言つたそうである。晩年まで時折り非常な感激を以つてこのことを子供たちに語つた。聖書に書いてある通りを一米国人が実践し、これを身に染みて感じた安部磯雄は、その後自ら行なう時にはこの範に倣つていたと思う。

さて、ドイツに行き、ベルリン大学を聴講している時にヴェント (Wendt) と言ふ人のイエスの教え (Lehre Jesu) と言ふ本を読み、これによつて奇蹟についての今までの疑問が氷解し、ドイツ留学の目的を達したので、二年間の滞独予定を変更して僅か半年足らずで、明治二十九年(一八九五年)帰国した。しばらく岡山教会の牧師をし、後再び母校同志社に教鞭を取つたが、明治三十二年、東京専門学校(後の早稲田大学)の講師となり、第一回普通選挙に立候補する昭和三年の前年まで早稲田に奉職した。同志社の先輩浮田和民先生は既に早稲田に教鞭を取られて居り、また同級の岸本能武田先生も早稲田を教えられて居たため恐らく早稲田に來たのであろう

4

が、宗教的にユニテリアンの既になつていたことと、社会主義的運動をするためには東京の方がよかつたことなどが主な原因であつたと思う。

早稲田に來たことは誠に幸いなことであつた。当時の校長大隈重信公は想像を絶した民主的な方であつた。幾多の顯職を歴任し、伯爵であり(當時はそれ以外は無であつても大したことであつた)、校長であつた大隈公が年令的にも遙か若輩であり無名の安部に最初に會つた時に「先生は何を専門にされていますか」と問われたそうである。六十年前未だに地位年令によつて人を差別待遇した時代に、このような態度はただ驚くの外はない。今から想像するに民主的な同志社で教育を受け、更に米国の大学で教年を過して民主主義を身につけ、目下の者に威張つたりしない代りに、目上の者、身分のある者に対しても決してべこべこしない浮田先生や安部磯雄は、当時とすれば相当變つていたと思ふが、大隈老公は二人を相当信用したようであつた。早稲田の講師になつて五年目の明治三十七年秋に早稲

田の野球部は全勝したので、予て選手たちに米國遠征を約束していた部長安部は大隈老公に遠征の許可と五千元の前貸を依頼した。(當時の五千元は早稲田に取って一年間の授業料の半額に当る)渡米後各大学などと試合をし、その収入が五千元になると言うことを詳細に説明したので、老公は直ちに個人的には賛成、一応学校の機関にかけて決すると言うことで、後ほど許可になった。渡米してみると早大チームは弱くて負けてばかりいる上に、収入の方はプロ野球の年鑑などを参考にして立案されたために(当時プロのことなど全然わかっていなかった)、当がはずれて帰った時には二千元しか返済が出来なかったが、この報告を受けた老公は悪い顔一つせず、「早稲田大学も月謝収入が一万円になったから心配しないでも宜しい」と言われたそうである。

5

一方その頃、社会主義運動も大いにやり、日露戦争の時は反戦運動をした。トルストイに反戦と社会主義についての手紙を送ったのもその頃であった。トルストイから来た返事の手紙が数十年紛失していたが昨年見つかり、

その中でトルストイは反戦について同志が居ることを非常に喜んだが、社会主義には反対していた。手紙の往復は一回限りであったが、もう少し社会主義について話し合ったら有益だったのではなかったか、と残念な気がする。

明治四十三年(一九一〇年)幸徳事件が起った。幸徳秋水と堺枯川の二人は平民新聞を出して居り、安部磯雄は客員のような形で平民新聞を援け、毎週一回英文欄を担当していた。もしこの関係が続いていたらなかなか面倒なことになったと思う。ちょうど事件の二年ほど前に婦人の問題で「苟しくも社会主義運動をする者は自らの行を慎しむ可きである」と言う安部の難詰に対し「個人の問題に立ち入るな」との返事があり、これで交友関係は断絶したのである。このため幸徳事件には全く無関係の状態にあった。

社会主義運動も幸徳事件の後には政府の非常な弾圧があったこと、早稲田大学の拡張につれて授業時間が非常に多くなり、ほとんど毎日学校に行って居ったと思う。教師としては時間が極めて嚴重で休講はなく、時間一ぱいやるので他で活動する余裕はなかったようである。

ある。午後三時頃からグラウンドに現われ、端然と木のベンチに腰をかけ、野球の練習を見るのが常であった。あらゆる機会に散歩をした(遠足と言った方が適當か)。これが健康法であったが、これも同志社在学中に覚えたことである。換気、食後三十分の休養等皆同志社で教えられたことを実践した。食卓で新聞雑誌を読まぬこともまた然りである。同志社に来るまでは酒を好んだが、同志社に来たからの禁酒禁煙は一生嚴重に守られた。家庭での飲物は客でも来ない限り白湯か水であった、書齋に茶を持って来いとか、水を持って来いと言ったのを見たことは只の一度もない。就寝は十一時、起床は七時と言うことが嚴重に守られた。原稿書きのためなどにこの規則は一度も破られなかったと思う。これも体を大切にするためであったと思う。

安部磯雄においてキリスト教と社会主義は矛盾なく結びついた。しかしスポーツ、特に野球は? 子供の私から見れば皆の腑に落ちないこの問題は不思議なことでは少しもない。精神と肉体を共に大切にしなければならぬということ固く信じていたから、スポーツが単に体を鍛えるばかりでなく、心をも楽し

ませる理想的なレクリエーションであり、特に青年が有り余るエネルギーをスポーツに発散させることに極めて重大な教育的意義を感じていたのである。望ましい社会が出現した場合、せつかく獲得した暇と金の健全な使用場所にスポーツはいらなないであろうか。

六四才の時（一九二八年）早稲田を去り、第一回普選で東京第二区から立候補し、当選した。昭和十一年の総選挙に私も初めて手伝ったが、選挙費用千五百円以内でやった。無産党の人々や投票した人々は信じたが、既成政の政治家たちはほとんど信じなかった。次の選挙は千円でやったそうだ。昭和十五年迫り来る戦争の気配に日本は軍国化し、これに対する最後のレジスタンスとして議員を辞職し、総ての社会的活動に休止符を打ったのである。時に七十六才、昭和二十四年八十五才で忽然として歿した。（早稲田大学教授）

安部磯雄先生著作目録

社会問題解釈法 東京専門学 校出版部 明治34年
 社会民主党宣言書（発禁）

労働新聞社 34年

社会主義論	平民社	37年	社会主義論(矢野・安部共著)	〃	35年	資本主義文明の涸落(S・ウェップ著)	明善社	13年
瑞西 地上の理想国	平民社	37年	〃	〃	37年	人口問題と産児制限	文化学会	13年
労働組合	〃	37年	〃	〃	37年	社会主義の時代	科学思想普及会	13年
北米の新日本	博文館	38年	〃	〃	38年	我等の態度	フエビアン協会	〃
理想の人	金尾文淵堂	39年	〃	〃	39年	地上の理想国・瑞西(新版)	〃	〃
応用市政論	日高有倫堂	41年	〃	〃	41年	思想と文化	〃	〃
社会主義小史	秀英舎	41年	〃	〃	41年	社会主義と社会改良	文明協会	〃
社会政策二論(エリイ著)	文明協会	42年	〃	〃	42年	産児制限の理論と実際	文化学会出版部	14年
婦人の理想	北文館	43年	〃	〃	43年	立党の精神(鈴木茂三郎氏蔵)	〃	昭和2年
最近の社会問題(早稲田大学蔵)	隆文館	44年	〃	〃	44年	社会民衆党の精神	同党京都支部	3年
都市独占事業論	博文館	44年	〃	〃	44年	土地公有論	クララ社	4年
現代戦争論(N・エンガル著)	博文館	大正元年	〃	〃	大正元年	失業問題	日本評論社	4年
労働問題及サンディカリズム	文明協会	3年	〃	〃	3年	次(の)時代	春陽堂	5年
土地国有論	科学思想普及会	3年	〃	〃	3年	不妊、結婚と人間改造	〃	5年
欧州社会党の現状	泰山房	6年	〃	〃	6年	国民の審判に訴う	先進社	5年
子供本位の家庭	実業之日本社	6年	〃	〃	6年	政治道徳論	クララ社	5年
労働問題	文明協会	8年	〃	〃	8年	自修論	慶文堂	5年
社会主義論(エリイ著、安部訳)	〃	9年	〃	〃	9年	インターナショナル歴史現状発展	春陽堂	6年
社会問題概論	早大出版部	10年	〃	〃	10年	(安部・小池訳)	改造社	7年
産児制限論	実業之日本社	11年	〃	〃	11年	社会主義者となるまで	岡倉書房	11年
社会主義は危険思想にあらず	科学思想普及会	12年	〃	〃	12年	青年と理想	〃	12年
科学思想普及会	〃	12年	〃	〃	12年	次代の廊清	〃	12年